

第1 報告

日本における20世紀農業食料システムとフォーディズム

農業総合研究所 立川雅司

今日われわれが日常的に目にしている農産物や食品は、20世紀初頭の時代からすれば、内容的にも大きく様変わりしていると共に、たとえ外見上は同じものに見えようとも、それが生産され食卓に上るまでの社会経済的文脈や、農業・食料をめぐる諸関係は、全く異なったものとなっている。

20世紀初頭においては、限られた品目ではあるが地方独自の品種を、主として狭い地域内で生産・流通させていたものと考えられる。これに対して戦後の日本に関しては、基本法農政のもとで展開された農業における選択的拡大と、高度成長期の食料消費の多様化と飽食化に象徴されるように、農業・食料の面においても大量生産・大量消費が幅を利かせるようになったとする議論がある。こうした大量生産・大量消費に関しては、レギュレーション学派的枠組みに倣って、「フォーディズム」という概念で捉えることができるかも知れない。

レギュレーション理論の他、欧米農村社会学者による「国際的食料体制論 (Global Food Regime)」などは、19世紀から20世紀にわたる長期的な歴史認識に依拠して構築された議論であること、また日本農業もこうした国際的な関係の中で日本としての農業食料システムを形成してきたことを基本的前提に置くならば、こうした欧米の議論の中で20世紀農業食料システムがどのように位置づけられているかをレビューしておくことは、先行研究を踏まえる意味で重要な作業であろう。

しかしその上で、日本の20世紀農業食料システムにおいて、フォーディズムとの関連を論じるとすれば、以下のような諸点について改めて検討する必要がある。

①このような農業食料システムにおけるフォーディズムを準備したものは何か。

⇒戦前の農業食料システムの特質（戦後との断絶と連続性）を明らかにする。

②国際的な食料体制の中で、日本はどのような位置を占めるに至ったか。

⇒第2次食料体制下では、日本は、アメリカのフォーディズム農業（大豆、トウモロコシ）の需要者であった。これによりコメなど国内完結型フードシステムと、小麦や飼料など国際的な食料体制に組み込まれたフードシステムとに、日本農業が分岐的展開を遂げた。

③フォーディズムは、日本ではどのような形態をとったか。

⇒フォーディズムは、日本では限定的な展開にとどまったのではないか。

④フォーディズムの次にくるものは何か。

⇒産業化（資本主義による包摂）のさらなる展開について検討する。

品質管理、垂直的調整、カスタマイズ、信頼、追跡可能性などが鍵概念となろう。

また以上に見た20世紀農業食料システムの展開が、日本の農村空間を、どのように形成・再編させたのかに関しても若干言及する予定である。

本報告は、歴史分析自体を行うのではなく、これまでの知見の再解釈し、これまでの歴史上の知見に新たな意味付与を行うことに重点がある。特に本報告では、日本における農業・食料を対象として、その20世紀システムがどのような「からくり」のもとに展開を遂げてきたのかを明らかにしたい。

E-Mail: tachi@affrc.go.jp